

お茶とサッカーのまちで多彩に進む近未来への道筋 推進力は新産業創出と市民に選ばれるまちづくり!!

令和6年は市制70周年と
サッカーのまち100周年の祝祭年

藤枝市（令和6／2024年度現在人口
14万16人）を訪ねた本年4月24日は、市名の



幻想的なまでに美しい「藤の花」のライトアップ（蓮華寺池公園「藤まつり」にて）

由来の一つとされる「藤の花」が、まさに最盛期を迎える頃合いだった。市民の憩いの場であり、約20種・250本の藤の花が咲き競い、年間150万人が来園する観光名所でもある蓮華寺池公園では、恒例の「藤まつり（第42回／4月19日～29日）」が、既に始まっていた。

ある藤枝市では、この時期、新芽を収穫する「茶摘み」の季節も迎える。藤枝市の茶摘みの季節の幕開けとして毎年行われる、樹齢300年の「藤枝の大茶樹」（樹高4m、周囲33m／大久保地区）の茶摘みを、本年は5月5日に実施。約30人がかりで、計約21kgの新茶が摘み取られた様子が、さまざまなメディアを通して全国発信された。



きたむらしょうへい
北村正平
藤枝市長

た。その所以^{ゆえん}は、藤枝市にとって二つの記念すべき「歴史的な節目」にある。

まず、県都・静岡市に隣接し、近代以前には東海道五十三次の宿場町・城下町（旧田中藩・田中城）として繁栄した都市基盤を継承、近代以降も常に、静岡県中部の中核的都市として発展してきた藤枝市は、令和6年3月31日に市制施行70周年の節目を迎えた。同時に昨春は「日本一のサッカーどころ静岡



樹齢300年を誇るお茶どころ・藤枝の巨大なシンボル「藤枝の大茶樹」



愛称「とんがりぼう」の「旧藤枝製茶貿易商館」。明治から昭和初期に茶葉の貿易を担った藤枝製茶貿易会社の社屋として稼働。現在は蓮華寺池公園に移設され、藤枝市の茶文化発信・観光交流拠点に

岡」でも「本場の中の本場」であることを自他共に認め、「蹴球都市」を掲げる藤枝市にとって、そもそもサッカーというスポーツ競技

の「種」が同地に植えられてから、ちょうど100周年の節目にも当たっていた。

その結果、市制施行70周年・サッカーのまち100周年を記念する多彩なイベントが、令和6年度いっぱい展開されることになった。

とりわけサッカーにおいて、藤枝市には「全国高等学校サッカー選手権大会」の出場常連校で、これまでに優勝4回、準優勝3回を数え、多くの日本代表選手も輩出してきた名門・藤枝東高校がある。同時に令和6年に開催された「第33回全日本高等学校女子サッカー選手権大会」で、優勝（令和4／2022年度から3連覇中、優勝回数も全国最多8回）したばかりの藤枝順心高校も立地している。

平成5（1993）年のJリーグ創設時から市民が待望していた地元発のプロサッカーチーム、藤枝MYFC（平成21／2009年創設、



「全国自治体職員サッカー選手権大会」で破竹の8連覇。無敵を誇る藤枝市職員チームの雄姿

令和6年・J2リーグ20チーム中13位）も藤枝市を拠点（藤枝市と共に志太榛原地域を構成する島田市、焼津市、牧之原市、吉田町、川根本町もホームタウン登録）に、サッカー活動のみならず、地域密着の多彩な活性化活動、発信活動を行っている。

また、東海社会人サッカー1部リーグに所属する藤枝市役所サッカー部は、「全国自治体職員サッカー選手権大会（全国32の自治体チームがトーナメントで競う方式）」で、平成7（1995）年から6連覇、平成26（2014）年からは8連覇（令和2／4年はコロナ禍で休止）を継続中で、優勝回数も最多35回の大記録を保持。天皇杯本大会へ

も3回出場するなど、「地方自治体における最強チーム」として、輝かしい実績を誇っている。

以上のようなことを考え合わせただけでも、藤枝市民にとってのサッカーは、もはや地域財産・地域資源であり、大げさでなく「血肉化した存在」といえるだろう。

そうした土壌の故というべきだろう。例えば、市制施行70周年とサッカーのまち100周年を記念し設営された、市役所本庁舎横「藤枝市特設サッカーミュージアム」（藤枝市民会館1階）は、市民や全国のサッカーファンの圧倒的支持を得て、本年度も継続公開になっている。





今年で33回を数える藤枝市発のサッカーイベント「全国PK選手権」は海外からも参加する大会へと成長。毎回、多くの老若男女が参加する



蹴球都市・藤枝市の歴史、藤枝東高校・藤枝順心高校・藤枝MYFCなどの歴史、藤枝出身の名選手たちの足跡など多彩な展示が人気の「藤枝市特設サッカーミュージアム」

このように市制施行70周年・サッカーのまち100周年の余韻は、今も随所に遺っている。

「藤枝市の市制施行は昭和29（1954）年3月31日で、平成21年1月1日には旧志太郡岡部町と合併し、新生藤枝市としての歩みを開始しました。令和6年は市制施行70周年の節目であると同時に、岡部町との合併からは15年の節目でもあったのです。

旧藤枝市と岡部町が一緒になることは、藤枝市民にとって長年にわたる願いでした。東海道五十三次において、岡部町の前身・岡部宿は21番目の宿場、藤枝宿は22番目の宿場として栄えました。そのように隣接しているという親しみだけでなく、藤枝市も旧岡部町も、東海道の宿場町としての街道文化や歴史文化への思い入れがとても強いのです。

特に歴史を物語る街道沿いの松並木など、由緒ある有形無形の文化財を大切にしながら互いに有効活用していくことが可能になるなど、藤枝市と岡部町が一緒になることはごく自然であり、いろいろな意味で意義のあるこ

とと考えられてきたのです。

静岡県内には東海道五十三次のうち22の宿場がありました。そのうち六つの旧宿場町を擁する県都・静岡市と、二つの宿場町を擁する藤枝市は、共同で日本遺産に申請（※「日本初」旅ブーム）を起こした弥次さん喜多さん、

駿州の旅／滑稽本と浮世絵が描く東海道旅のガイドブック（道中記）し、令和2年度に文化庁から日本遺産に認定されています。今後はこの貴重な歴史・文化遺産を、観光資源として、さらに有効に活用していきたいと考えています」

藤枝市の市制施行70周年と藤枝市へのサッカー導入100周年が重なったことへの感慨を問う質問に、万感の思いを込めつつそう語るのには、自身も藤枝東高校の卒業生であり、今もサッカーそのものを「趣味の一つ」と自認する北村正平藤枝市長だ。

藤枝市生まれの北村市長は、平成20（2008）年5月に実施された藤枝市長選に出馬して当選。本年度で就任から5期17年目を迎えている。



旧東海道・岡部宿付近の松並木



日本遺産の重要な構成要件でもある旧岡部宿「大旅籠柏屋」の1階上がりがまち。当時の旅人の様子が等身大のフィギュアで再現されている

藤枝駅前の再開発で図る 広域都心としての中心市街地形成

藤枝市を訪れ最初に感じた華やきの源泉は、季節的な意味合いや、市制施行70周年・サッカーのまち100周年の余韻だけではない。

藤枝市の表玄関、JR東海道本線・藤枝駅の北口側と南口側では、近年、志太榛原地域の広域都心形成にもつながる中心市街地再開発が実施されてきた。その成果や進行中の様子は、駅に降り立ったただけで目の当たりにでき、現在進行形の躍動的な雰囲気、たちどころに感受することができるのだ。

例えば、駅北口側では現在、令和8

藤枝市

市 政 ル ポ

(静岡県)



藤枝駅北口前にある藤枝市初のコワーキングスペース「未来共創ラボ・フジキチ」

(2026)年に着工予定の「藤枝駅前1丁目6街区再開発事業」(地上17階、延床面積1万3000㎡超の複合ビル建設計画)、令和9(2027)年に竣工予定の「藤枝駅前1丁目9街区再開発事業」(地上21階、延床面積1万6300㎡超の複合ビル建設計画)などが、続々と動き出している。

また、それに先駆ける形で、「藤枝駅前1丁目8街区再開発事業」(地上17階、住宅棟と商業棟で延床面積1万3770㎡超の複合ビル・藤枝ミキネ)が、平成30(2018)年に竣工。商業棟には、医療施設、高齢者や子育て支援施設も整備されており、この中には地域の「コワーキングスペース」未来共創ラボ・

フジキチ」も、令和4年6月にオープン。スタートアップなど80社が利用し、活況を呈している。

出来上がりつつある新しい革袋(まち並み)に、既に新しいワイン(新たな民間活動)が注ぎ込まれつつあるのだ。

駅を挟んだ南口駅前では、市有地有効活用事業として、平成22(2010)年に、複合商業施設「オーレ藤枝」(地上9階、商業施設棟と445台収容の自走式駐車場棟で構成)が竣工。平成28(2016)年には、隣接地に同一計画の「ホテルオーレ」(地上14階地下1階)が竣工している。

さらにそれに先駆け、平成17(2005)年には、同じく市立志太総合病院跡地を活用した事業、映画館(シネマコンプレックス)を含む複合商業施設「Bivi藤枝」が竣工している。同施設においては、1階に

「藤枝市産学官連携推進センター」が、また3階には市立駅南図書館が設置されている。

「藤枝駅北口・南口前の中心市街地再開発と活性化



藤枝駅南口の複合商業施設「Bivi藤枝」1階にある「藤枝市産学官連携推進センター」の活動交流スペース



中心市街地再開発が進むJR藤枝駅周辺。写真は藤枝駅南口の「ホテルオーレ(左側)」と複合ビル「オーレ藤枝(右側)」

は、本市の重点戦略の一つ『コンパクトシティ+ネットワークのまち』を創る上で不可欠の事業です。そして、その戦略の最前線に位置する拠点施設の一つ『藤枝市産学官連携推進センター』の目的は、多岐にわたっています。例えば、同センターには現在、藤枝市と包括連携協定を結んでいる静岡産業大学、静岡理工科大学、大正大学のサテライトキャンパスが設置されています。また『藤枝駅前1丁目9街区再開発事業』で建設される複合ビルには、大正大学(東京都豊島区)の『仮称・インキュベーションセンター』の進出も決まっています。

ゆくゆくは『藤枝市産学官連携推進センター』を軸に、藤枝駅の北口・南口の周辺エリアには、大学だけでなく、企業の研究機関、

大学以外の研究機関などの集積をさらに図ると共に、新たな産業の創出や人材育成などを、産学官民の連携で展開していくための拠点的なゾーンにしていきたいとも考えております」(北村市長)

藤枝駅周辺の再開発で地域経済の活性化を図り、その成果が徐々に上がりつつある藤枝市は、一方で本年3月に「藤枝市新産業創造プラン『藤枝H A L E バレー構想』(「健康・予防のまち」を築く健康生活産業の創造)」と題する新たな施策のプランニングを発表。地域活性化の推進を同時多発的に図っている。



藤枝市は県内6大学(静岡大学、静岡県立大学、常葉大学、静岡福祉大学、静岡産業大学、静岡理工科大学)との包括連携協定にのっとり、地域課題解決を多角的に模索している(6大学地域政策研究会)

健康・予防に特化の新産業創出と 選ばれるまち・藤枝の実現

「藤枝市新産業創造プラン」では、地域に立地する既存の中小企業振興というテーマと共に、高齢化社会のさらなる進展を見据えた、成長戦略としての「健康・予防に特化した新産業」の創出というテーマの同時遂行が目指されている。

「私は首長として、常に生活に密着する『健康・教育・環境・危機管理』の頭文字に由来する『4つのK』を政策の柱に据え、それを基盤に市政運営を実施してきました。中でも『健康』は誰もがいつまでも幸せな生活を送る上で不可欠なものです。

本市には古くから、静岡県中西部の広大な地域に大きな恵みをもたらしている大井川の恩恵を受け、肥沃な平野と豊富で優良な水資源のおかげで、農業と共に食品・医薬品関連の企業が集約するなど、『食と農』『健康医療』の充実した地域性が自然と育まれてきた経緯があります。

今後ともこうした地域産業の持続性を確保すると共に、より一層の成長を促すためにも、今から次の一手を打つ必要がある。そのような思いから、本市の強みである『食と農』『健康医療』を生かした『健康生活産業』を興し、市内経済をけん引する核となる成長産業を創出するべく策定したのが『藤枝市新



藤枝市では市内12の施設に「デジタル支援員」を配置。市民のデジタルに関するあらゆる質問に応えるとともに、市民のデジタル活用を支援する

産業創造プラン』なのです。

同時にこのプランは、人口減少・少子高齢社会という難局にあって、持続可能なまちづくりに向けた抜本的な課題解決を図ろうとするための方策、方向性を示したものでもあります。すなわち、地域産業の高付加価値化や人が集まるための仕組みづくりを推進することと、市外からの企業の進出を呼び込むとともに、既存の地域企業が新たなイノベーションを図り、発展的なチャレンジをできるような環境づくりを行いたい。

それによって地域経済や所得水準の向上を促し、市民の生活水準のボトムアップと同時に、市民の健康長寿の延伸を達成することも目指しています」(北村市長)

藤枝市

(静岡県)

市 政 ル ポ

藤枝市の産業構造は、中部地方全体の基幹産業ともいえる自動車産業の集積と、茶葉の生産や水稻栽培を軸とする県内屈指の有機農業地帯としての集積が両立しているところが特徴的といえる。その中においても、農業に関しては令和5(2023)年に「オーガニックビレッジ宣言」を行うなど、より健康志向の強い生産体制が拡充化しつつある。

加えて、北村市長の発言にもあるように、製薬産業(工場・研究所など)の集積が伝統的に進んだ地域でもある。同時に医療施設・研究機関の充実した県都・静岡市の隣にあって、さらに救命救急なども担い、地域医療の拠点である市立総合病院をはじめとする四つの総合病院を軸に、医療環境が充実している藤枝市では、近年、行政と医療機関の連携による「めざそう!健康・予防日本一」ふじえだプロジェクトを展開。市民の特定検診やがん検診受診率も全国トップクラスの水準を保つなど、総合的に健康・医療への関心が高い地域性を構築している。

藤枝市には、健康・医療用食品の素材としての価値が世界的に認められつつある「茶葉の一大生産地」であるという背景もある。

今後の事業の進捗とともに幅広く推進されていくことが予測される、『藤枝市新産業創造プラン』に基づいた「薬品・サプリメント・健康食品」などの新規事業創出においては、例えば茶葉の優れた成分の活用の特化したような、藤枝市ならではの特徴的な展

開も期待されるところだ。

藤枝市ではまた、健康予防をテーマとする新産業創出(地域経済の活性化)とは車の両輪のような位置付けにある、いろいろな意味で「選ばれるまちづくり」の推進プロジェクトとして、豊かな「地域資源を活用し、多様な主体が活躍するエリア形成」を実現するための「多様なまちづくり構想」が展開されようとしている。

中山間地域の振興を目指す「地域とアーティストで作る陶芸村構想」(本年)。固有のサッカー文化を軸に国内外から多彩なスポーツ活動・交流事業を呼び込む「藤枝シティ・トレセン構想」(令和8年)。中心市街地と一体化したスマートシティ形成を目



「地域とアーティストで作る陶芸村構想」の拠点施設。本年9月にオープンする予定だ

指す「スマートコンパクトシティ構想」(令和8年)。旧市街地周辺エリアの歴史・文化と芸術文化を結び付けた、新たな滞在型のまちづくりを目指す「旧市街地再生プロジェクト」(令和9年)などだ。

藤枝市では現在、このように非常に多彩なカタチで、地域特性や地域財産・地域資源をフル活用した地域活性化施策・事業の数々が、同時多発的かつ、強い連携性を持ちながら展開されつつある。

そして、その全てに予測される近未来の波及効果は、「選ばれるまち・藤枝」へとベクトルを向けているかのようだ。今後の展開が非常に楽しみなのである。

(取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和7年4月24日)



江戸時代以来の伝統を誇る「藤枝大祭り」は毎年10月の開催。長唄に合わせ地踊りを披露する優雅な祭りだ